

加藤弘之著

中国経済学入門

——「曖昧な制度」はいかに機能しているか

名古屋大学出版会／2016年3月／248頁／4500円＋税



原田忠直

加藤弘之の美学

社会学者・小熊英二は、対談集『真剣に話しましょう』のなかで、物書きの資質、あるいは研究者のあるべき姿について、次のように語っている。「その作品を作る過程で著者自身が変化していったり、化学反応を起こしているものが好きなんです。そういう化学反応がない人は、何を書いてもみんな同じになってしまう」

【小熊2014:11】。この小熊の発言に対して、世の書物が、どの程度耐えうるのか定かではない。しかし、加藤弘之氏（以下、著者とする）のこれまでの研究業績を振り返るならば、そこに多くの化学反応を発見することは容易い。むしろ著者の研究スタイルに触れば、化学反応が生まれることは必然だったとさえ思える。

随分、昔のことだが、著者から、研究者としての心得を教わった。それは、「論文とは、氷山の一角に過ぎない」という言葉を聞かれた時である。六甲台の中華料理屋だったか、それとも、上海近郊農村における調査後の宴会の席上だったか覚えていないが、その真意は、研究成果を世に問うためには、書物を貪り、靴底をすり減らしながらフィールドを回り、「氷山の

「一角」の数十倍、数百倍もの「氷塊」を海中にしつかりと構築しなければならぬ、という教えである。もちろん、それは、一つの前提に過ぎず、「氷山の一角」は、「海中の氷塊」の一部として描き出すのではなく、「昇華」したものでなければならぬ、という教えが続く。つまり、「一角」とは、日々の努力を小出しに発表するだけではないけないという戒めでもある。その上、著者の要求は高く、海上に突き出た「一角」には美しさが求められる。著者は、「この表面はツルンとした美しい三角錐」でなければならぬ、とその手で小さな三角形を作り、自らの美学を私の前で実演してみせた。言うまでもなく、「氷山の一角」とは、「海中の氷塊」の内部で幾度もの化学反応が繰り返されることによって、美しく輝き出すということであろう。

『中国経済学入門——「曖昧な制度」はいかに機能しているか』についての書評を書くにあたり、著者の研究スタイル、あるいは美学のようなものが、自然と頭に浮かんできた。本来、書評なる

ものは、「氷山の一角」を論じれば充分といえよう。しかし、本書が、著者の過去の研究成果と太い糸で結ばれている点を見逃すわけにはいかない。少なくとも、『中国の経済発展と市場化——改革・開放時代の検証』[加藤 1997]、『進化する中国の資本主義』[加藤・久保 2009]、『移行期中国の経済制度と「包」の倫理規律——柏祐賢の再発見』[加藤 2010]、そして、前作の『曖昧な制度』としての中国型資本主義』[加藤 2013]を読み返せば、「二重の移行モデル」、「包」(請負いを指す)、「曖昧な制度」という連続するキーワードを発見することは可能である。そして、これらキーワードの概念は、時間の経緯とともに、変化していることに気づく。たとえば、「二重の移行モデル」を示す図解も、その大枠は変わらないが、付随する語句の説明は微妙に変わっている。また、「包」についても、当初は、その再評価の域を出なかつたものが、「曖昧な制度」という本書のメイン・テーマへと「昇華」されていくことになる。これらは、すべて著

者が抱く「海中の氷塊」のなかで生まれた化学反応の結果といえよう。

しかし、私は、著者の化学反応が、すべて「正しい」と評価することはできない。すなわち、著者が「曖昧な制度」という概念に辿り着くまでの化学反応が、見事に「昇華」されたのかどうか、少なくとも著者の「海中の氷塊」に忍び込み、化学反応の痕跡を辿りながら、検証する必要があると考えている。もともと、このような方法が、書評として正しいのかどうかは分からない。その上、周知のように著者・加藤弘之は、すでにこの世に存在していない。著者が反論できないという状況のなかで、書評を書くこと、とくに批判点を展開することに、強く戸惑いを感じているのも事実である。しかし、纏わりつく雑念はあえて払いのけ、以下、批判点を中心に書評を綴りたい。ただし、ここでの批判は、決して一方通行的なものではなく、すべからず私自身がすべての責を負い、今後の研究生活のなかで、その解決に向けて必ず努力する、という決意をここに留めておきたい。

二つの主張

本書は、基礎編、応用編、課題編の三部からなる。

第一部の基礎編では、比較制度分析の視点から、制度とは何かという著者の見解が示された上で、「曖昧な制度」とは、「曖昧さが高い経済効果をもたらされるように設計された中国独自の制度」

「加藤 2016:12」と定義される。そして、長い歴史的伝統、広大で多様性に富む風土、集権的な社会主義の実験という要素の相互作用を通して「曖昧な制度」の形成過程が明らかにされる。

第二部の応用編では、「曖昧な制度」が特徴的に現れている土地の集団所有、市場競争のメカニズム、混合所有企業のガバナンス、中国式イノベーション、対外援助などの制度や領域において、「曖昧な制度」がどのように機能しているのか、すなわち「高い経済効果」がいかに発揮されているのかを検証される。

第三部の課題編では、「曖昧な制度」によって引き起こされた諸問題が取り上

げられる。その一つに腐敗問題が指摘され、「曖昧な制度」を前提とする限り成長と腐敗の並存は避けられないという見解が示される。また、もう一つは、格差問題に対して、トマ・ピケティの『21世紀の資本』を参照しながら、格差拡大のメカニズムとその対応策が議論される。

このような構成の下、著者は、本書において主に次のような二点を主張する。

第一に、著者は、「曖昧な制度」から改革開放後における中国経済の成長要因を読み解くのだが、中核をなしているのは、柏祐賢の「包」論である。それは、著者が、前述した定義よりも厳密に追求した少々長めの定義、すなわち、「高い不確実性に対処するため、リスクの分散化をはかりつつ、個人の活動の自由度を最大限に高め、その利得を最大化するように設計された中国独自のルール、予想、規範、組織」〔加藤 2016: 30〕をみると、**「包」**との関連性を容易に見出すことができる。「不確実性」「リスクの分散化」、そして**「自由」**とは、柏が**「包」**を説明する時に幾度も利用した概念にほ

かならない。ただし、著者は、柏がそれほど重視しなかった**「自由」**の概念を強調している点に大きな違いがある。

もっとも、著者は、「包」を再発見した当初、「個人の活動の自由度が最大限に高められる」という見解に、必ずしも辿り着いてはいたわけではない。著者が「包」について本格的に論を展開した「移行期中国の経済制度と包の倫理規律——柏祐賢の再発見」と本書の「包」についての記述〔加藤 2016: 47-51〕を比べれば、その違いは明らかである。前者の論文において、著者は、「包」に連なる人びとの関係を「水平性」という言葉で表す。これは、柏が辿り着けなかった新しい概念であり、著者によるオリジナルな「包」の再評価でもある。しかし、「包」によって連なる人びとの状態を「重層性」という柏の概念をそのまま踏襲する。つまり、著者は、人びとの関係性を、一方では「自由」の概念へ直結する「水平性」という言葉で表現しながらも、他方において「上下関係」を彷彿させる「重層性」という言葉を利用し、や

や整合性に欠ける論理が示されていた。

ところが、著者は、その後、「重層性」を「多層性」という言葉に置き換える。そして、この「多層性」を、「包」の実情を参照にするように「ピラミッド型の上下に積み重なった重層構造となる場合もあるが、上下左右に重なり合い、相互に入れ子状になった構造を形成する場合が多い」「加藤 2016: 50」とし、こうした「多層性」と「水平性」とが結びつき、「上下の命令関係や下請け関係とは異なる対等・平等な人間関係」「加藤 2016: 50」を「包」の内部に発見する。このような関係性とは、「個人の活動の自由が最大限に高められる」ための前提条件であり、この「自由」の概念こそが、中国経済の高成長の要因であると主張する。こうした主張は、いうまでもなく、中国経済を読み解く上で非常に重要な視点であり、著者の「海中の水塊」における化学反応が、見事なまでに「昇華」した結果にほかならない。

第二に、もしも本書の目的が、「曖昧な制度」という視点から中国の経済成長

の要因を探ることに絞られていたら、つまり、前述した「曖昧な制度」が「高い経済効果」を生み出すことだけを検証する「中国経済論」の範疇に留まっていたら、本書は、今後、中国経済が停滞期に突入した時、歴史に埋没する運命を余儀なくされたかもしれない。しかし、著者は、本書のタイトルを「中国経済論」ではなく「中国経済学」とし、大きな一歩を踏み出す。「もし、「曖昧な制度」という視点から、中国経済の運行メカニズムの全体像がうまく叙述できるとすれば、そうした視点で書かれた中国経済論の著作に、「中国経済学」というタイトルをつけることもあるいは許されるのではないだろうか」「加藤 2016: 4」。さらに「曖昧な制度」は、他国にとつての参照価値以上に重要な価値を含んでいると、著者は考えている。それは、これまでとは異なる枠組みで経済学を捉え直す、ある種の糸口を「曖昧な制度」が与えているのではないか」「加藤 2016: 210」と大胆に本書の意図を主張する。つまり、著者は、「曖昧な制度」に、私たちがこれ

まで触れたことのないような経済学の法則性、あるいは新たな価値を見出そうとしたといえよう。こうした著者の姿勢には強く共感できる。しかし、本書を幾度も読み返しても、その意図は、なかなか腹に落ちてこない。「曖昧な制度」は、一時的に存在しているものか、今後も残り続けるものなのか、実にはつきりしない。「先進資本主義国の経済システムへの収斂がいかに望ましいとしても、すぐに現行のシステムを変えることはできないし、当面は、「曖昧な制度」を維持しその内容を望ましい方向へと改善していくことで、前に進む以外に道はない」「加藤 2016: 208」と著者は述べるが、たとえ経済学の法則性や新しい価値観を見出したとしても、「当面」という曖昧な時間概念のなかに消滅してしまう程度であれば、新しい法則や価値を内包する「経済学」に辿り着けるのか、と疑問を抱かざるを得ない。

このスッキリとしない胸のわだかまりの源泉はどこにあるのだろうか。私は、著者が、「包」を再発見する前にすでに

導き出していた「二重の移行モデル」と「包」とが上手く化学反応を起こすことなく、未消化のまま「海中の氷塊」に残されてしまっているのではないかと推測している。「二重の移行」とは、伝統経済から市場経済への移行、計画経済から市場経済への移行という二重の移行のことであるが、著者は、この二重の移行と「包」の関係を次のように描く。「改革開放後、とくに市場移行の初期段階における市場秩序の混乱、経済環境の不確実性を高め、さまざまな分野で「包」（請負）を復活させる要因になった」（加藤2010: 37）と説明する。つまり、不確実な時代だからこそ、あるいは曖昧な領域が存在しているから「包」は蘇ったと、著者は判断したといえよう。しかし、こうした理解は、必然的に「市場経済」という著者自らが設定した一つのゴールが、「包」、そして「曖昧な制度」を語る上で、著者の行く手を阻むことになってしまったのではなからうか。「市場経済」またはグローバル・スタンダードの浸透は「時間の問題」であるという認識

をどこまでも捨てることはできず、結果として、「曖昧な制度」の存続時間についての見解は揺れ続けることになる。一言でいえば、著者は、二重の移行モデルに「包」を放り込んだことよって、「曖昧な制度」論は、曖昧な記述から逃れられなくなってしまうのではないだろうか。これが、本書に対する私の一つの批判点である。

ただし、だからといって本書を否定するつもりはない。むしろ著者の未消化な化学反応を少々離れたところから眺めれば、少なくとも次のような問いかけが自然と零れる。「曖昧な領域が存在しているから」「包」が復活したのか。それとも、「包」が存続しているから、曖昧な領域（あるいは「曖昧な制度」）が生まれたのか？」

「包」論再考

右記の自問をさらに詳しく述べれば、次のようにまとめることができる。すなわち、「曖昧な制度」あるいは「曖昧な領域」が存在しているから「包」が機能

しているのではなく、「中国的なるもの」の「包」のシステムが、所有制^①、市場^②、汚職問題^③、格差問題^④などの制度や領域を曖昧な状態にせしめ、中国独自のフレームワークを形づくっているのではないか」というのが、私の一つの仮説である。言い換えれば、「包」とは決して受動的なシステムではない。もちろん、政策、制度などから影響を受け、その機能^⑤が変化することもあるだろうが、それ以上に「包」とは、制度や領域を変える力を内包した能動的なシステムではないのか。こうした仮説は、いうまでもなく著者とは、真逆な視点であり、「曖昧な制度」から翻り、「包」を中国経済・社会・政治の中心に据えた論点である。また、著者のように、市場経済、グローバル・スタンダードというゴールを必ずしも設定しているわけではない。むしろ「包」をひとつの原動力として、まわりの制度を変質させながら、中国経済は、独自の進化を遂げていくのではないだろうか。そして、この仮説を論証したとき、これまで触れたことのないような経済学の方法

則、あるいは新たな価値が初めて浮かび上がり、著者が望んだ「中国経済学」と呼ぶにふさわしいフレームワークに近づけるのではなかるうか。もっとも、そのための論証については書評の枠を大きく逸脱するため別稿に譲り、以下では、「包」の能動性という視点から本書をみると、次のような点が指摘できる。

第一に、前述したように著者は、「個人の活動の自由が最大限に高められる」ための根拠を「包」を構成する人びとの「水平性」に求めるのだが、何故、この「水平性」が維持されるのか、「上下の命令関係や下請け関係とは異なる対等・平等な人間関係」が築かれるのか、その背景を明確に説明しているわけではない。つまり、「包」のシステムの下で、いかに「自由」が再構成され続けているのか、それが受動的なものなのか、あるいは、能動的なものなのか不明瞭のままである。少なくとも著者が、「水平性」が堅持される理由として、「水平的な関係を持たなければならぬ」という一つのルールに人びとがただ従っているからと判断

していたとするならば、その根拠は極めて表層的であるといわざるを得ない。

第二に、著者は、本書のなかで、柏の「包」論の一つの論点であり、重要な機能の一つである「利潤の社会化」について、ほとんど言及していない。確かに、「利潤の社会化」とは、資本蓄積を妨げ、経済を停滞させるという柏の経済停滞論の中核的な要因であり、さらに、「利潤の社会化」によって「社会は安定する」という柏の主張も含め、「利潤の社会化」論は、実際に著者が垣間見た改革開放後の急成長を続ける中国社会の、格差問題が表面化する中国社会の実態とは随分とかけ離れたものである。それゆえ、あえてテーブルの上から落とした可能性は否定できない。そして、「利潤の社会化」と「水平性」とが矛盾し合う「包」の機能であるとして著者が見定め、柏の停滞論の要因を現実にとぐわなないという理由から「利潤の社会化」論を避けたとするならば、それは同時に、「包」の能動的側面を見失う原因になったといえよう。少なくとも「利潤の社会化」と「水平性」とが、

著者のなかで化学反応を起こさなかったのではないかと思わざるを得ない。

では、「包」の能動性とはどのようなものか。

それは、「包」とは、決して固定化されたものではなく、絶えずスクラップアンドビルドを繰り返すというその実態から読み取ることができる。スクラップとは、意図的に不確定な社会を作りだすこと、すなわち、一つの「包」の関係が、とりわけ外部の要因によって壊されるのではなく、その内部から能動的にスクラップされることを意味する。そして、不確定な状態のなかから、人びとは「包」を再構成する、つまり、ビルドされるという状況が繰り返されることである。

何故、「包」は、再構成され続けるのか。その一つの理由は、利潤獲得のためである。

この利潤獲得という視点だけであれば、柏も著者も「包」のスクラップアンドビルドについて、すなわち、「包」の能動性について熟知していた。たとえば、柏は、「社会的不確定性の排除を意図す

るような動きは絶対に起こりえないであろう。社会的に不確定こそ彼らあらゆる層の生存の地盤なのである」としている[柏 1986: 196]。また、著者も「社会的に不確定性こそ利潤の源泉なのであり、請負者はそこから利潤を得る（可能性を見出す）のである」[加藤 2016: 48-49]と柏を踏襲する。このように両者とも、利潤を手にするために、「包」はスクラップアンドビルドされるという認識を持っていた。つまり、人びとに新たな利潤獲得のための機会を創出するためには、不確定な状態が生み出され、不確定な状態のなかから、人びとは再び利潤獲得のために「包」を再構成する実態、言い換えれば、「包」が存在する時間は一時的なものであり、利潤を獲得できる時間には限りが設けられている状態であることを知らないわけではなかった。ところが、柏も著者もこうした「包」の「生存の地盤」としての役割を認識しつつも、そこに「水平性」「利潤の社会化」とを結び付けて議論を深めることはなかった。そもそも「水平性」と「利潤の社会

化」という機能は、著者が捉えたようにまったく異なる性質のものであることに違いはない。しかし、それらの機能が維持され続けるためには、利潤獲得のためと同じく「包」はスクラップアンドビルドを繰り返さなければならない。理由は、実に簡単である。もし「包」の構成員がいつまでたっても同じ「人」によって固定化された状態が続けば、そこには必然的に上下関係が生まれ、「水平性」を堅持することはままならなくなると推測することは容易い。また、同様に「包」の構成員が、固定化された状態では、「利潤の社会化」とは、「包」の構成員だけが受け取る恩恵となってしまう。それを「利潤の社会化」という言葉で表現することはできない。その上、「包」の外部にいつまでも「包」の構成員にならない「人」が固定化するとすれば、彼らに不平・不満が蓄積される可能性は高く、「社会の不安定化」を促進することになるであろう。

さらに、柏も著者も、「包」の関係を結ぶ時、「第三者たる他の人」の選択基準を

明確に示していないのだが、その選択基準を考察すれば、「水平性」や「利潤の社会化」が容易に維持できない状況を窺い知ることができる。たとえば、柏がその選択に関して述べている箇所を抜き出せば、「包」的第三者は、自己以外に求められた人である」[柏 1986: 159]、「単に見出された人の発見があるのみ」[柏 1986: 187]というように、身分、地位、学歴、年齢、性別などの社会的因子が反映されているわけではない。むしろ、どこまでも「偶然の出会い」が支配している印象を持つ。もちろん、第三者の発見とは、宴会の席上、趣味などを通して、日常生活のなかでの偶然によつて、その関係が結ばれていくのが、その実態により近いことに間違いはないであろう。しかし、「偶然の出会い」のなかであつても、次のような選択基準が暗黙の了解として存在していたのではないか。

一つ目の基準として、資金力を挙げることができる。「包」の構造の末端に行けばいくほど、資金力は低下していったのではないだろうか。つまり、「第三者

たる他の人」の選択基準は、下降的なベクトルを有し、自分よりも資金力の乏しい「人」が発見されていったのではなからうか。二つ目の基準として、「包」の経験者であるかどうかという点は、それほど重視されなかったのではないか。つまり、「包」に連なる「人」以外、たとえそれが、まともな仕事すらない不安定就業者や失業者であっても、「偶然の出会い」を通して第三者の対象となり得たのではないだろうか。言い換えれば、選択基準の下降的ベクトルは、既存の「包」に連なる「人」の壁を突き破り、その外側にも及ぶものであったと推測される。このように「包」の関係が結ばれる時、その下降的ベクトルには、予め「上下関係」は組み込まれていたのだが、それにもかかわらず「水平性」が堅持され、「利潤の社会化」がその言葉の意味する通りに実現できるのは、「包」が、絶えずその構成員をシャッフルさせながら自己再生を続けていたからにほかならないといえよう。このように「包」のスクラップアンドビルドとは、柏や著

者が捉えたような利潤獲得だけが、その原動力では決してない。

もちろん、「包」の関係を結ぶのは、利潤を獲得することが第一の理由に違いないだろう。しかし、同時に、「包」を通して、「人」は、「水平性」（あるいは「自由」といった方がよいだろう）も実現し、さらに社会の安定も実現したいという欲望も働いている。「利潤」「水平性」に基づく「自由」、そして「社会の安定」といったすべてを手に入れようとすることは、随分と贅沢な望みであるようにも映るが、「包」がスクラップアンドビルドを繰り返すことによつて、それらが実現することを顧みれば、そこに、「包」に連ねる人びとの能動的側面を発見することは決して難しいことではない。そして、そのような能動的な「包」の視点から、著者が論証した土地の集団所有、市場競争のメカニズム、混合所有企業のガバナンス、中国式イノベーション、対外援助などの制度や領域について改めて読み替えを行っていけば、中国経済の新たな像が浮かび上がってくるので

はないだろうか。

遺言

本書が出版された二〇一六年三月、私は、中国にこの書を持参し、電車やバスでの移動中、ホテルのベッドで、食るように読み続けた。気になる箇所にはアンダーラインを引き、欄外にメモを書き綴った。帰国後、入学式、ガイダンス、そして、授業が始まるなかで、本書のノート作りは遅れたが、それでも、四月の下旬には、なんとか完成させた。ちょうど、その頃だったと思うが、某全国紙に本書の書評が掲載された。読んではみただものの、著者の意図は、ほとんど汲み取られていない内容になんとも嫌な気分にも襲われた。「これはひどい、加藤先生も怒っているんじゃないか」とゼミの時間にはばやっていると、ある学生から、「それならば、自分で書けばいいのではなか」と進言され、ノートをパソコンの脇に広げながら二千字程度の短評を急ぎしたためた。その主な内容は、本書評でも触れた「包」の「利潤の社会化」、

つまり、「分配論」が欠落している点を中心に随分と批判的なものだった。そして、その短評を著者に直接送った。著者とは、私が大学院生の頃、神戸大学の研究会に誘っていたが、中国の調査に連れて行ってもらったのだが、その後、疎遠となり、実に一五年以上連絡を取っていなかった。送信ボタンを押すまで随分と時間がかかったと思うが、それでも勇気を振り絞り短評を送った。翌日、著者から次のような返事が届いた。

今回は、拙者についての短評をお送りいただき、ありがとうございます。あの書評は貴兄のいうとおり、なにこれ？という感じで、無いよりマシといった程度で、ひよっとしたらない方が良かったかもしれません。いずれにせよ、貴兄がそれに反発してくださったことに、感謝します。

中国経済学はたしかに言い過ぎだし、まだ完成からはほど遠いですが、数年前から体調を崩していることも

あって、若い人にバトンを渡す歳になつたと自覚し、そういう思いを込めて、この本を仕上げました。付論に書いたとおりの気持ちです。

是非、貴兄がさらに議論を發展させてくださることを期待しています。

本格的な書評も、読ませていただきたいものです。

取り急ぎ、お礼まで。

このメールは、残念ながら私にとって著者からの遺言になってしまった。本格的な書評を著者に送ることができず、自らの力不足を嘆き、後悔は募るばかりである。また、本書評が、著者不在のなかで、どれほどの意味があるのかという自責の念に打ちのめされそうでもある。しかし、「包」、「曖昧な制度」についての議論を發展させることが、著者の意志を継ぐことであるとすれば、それは、私にとつて望むべきものであり、勇気と喜びが胸の奥から湧き上がってくるようでも

ある。

著者がそうであつたように、中日ドラゴンズ、櫃まぶし、味噌煮込みうどんをこよなく愛す同郷の後輩研究者として、著者の志を少しでも具現化できるように努めていきたい、と最後に記し、本書評を閉じた。

注

〈1〉たとえば、農地と「包」の関係をみれば、少なくとも民国期、改革開放以降というまったく異なる時代における所有制の下でも「包」は機能していたといえる。何故、異なる所有制の下でも機能できるのか？と検証することは「包」の本質を見極める上で重要な視点といえる。また、近年の農地における所有権、請負権、経営権の分離過程においても、「包」との関係性を追求する必要があると考えられる。

〈2〉柏は、「集・市・廟会などは、各地区・各時期において、それぞれに孤立的・閉鎖的に成立し、大都市市場価格とは無関係な市場価格が成立している」と指摘しているが〔柏 1986: 175〕この記述から、「包」とは「市場」を作り出

し、「いい値」で商品を販売し、利潤を獲得していた事実が浮かび上がる。つまり、このような実態は、本書評の一つの論点でもある「包」の能動的側面にほかならないのだが、こうした現象は、改革開放後の現在でも散見できる。たとえば、「偽物市場」「爆買い」などは人びとが「包的」につながら、それまでには存在しなかった「市場」を作り出した事例といえる。

〈3〉汚職問題と「包」について語るとき、忘れてならないのは、官僚と民間の間で「水平性」の関係が保たれているのかという視点ではなからうか。別の言い方をすれば、「包」に連なる「人」とは、あるいは「包」の構造に組み込まれるためには、「私人」であることが大前提である。少なくとも官僚が、その権力を背景に横柄な態度で「包的」的繋がりを持とうとすれば、「水平性」は堅持できず、個人の自由度が最大限に高められることはない。この意味からいえば、汚職問題とは、「私人」と「公人」の概念をしっかりと捉え直し、あるいは、「包」によって、その概念がどのように変化したかを明らかにすることが重要ではないだろうか。

〈4〉本書では、柏の「利潤の社会化」論がほとんど触れられておらず、著者が「包」と格差問題をどのように捉えていたかは定かではない。それゆえ、改革開放以降において「利潤の社会化」がどのように展開しているのか、それを探ることは大きな課題として残ったままである。とくに、停滞要因としての「利潤の社会化」が生じていたとしても、経済は成長を続けることができるというメカニズムを説明することが必要であろう。

〈5〉柏は、「包」の重層化構造のなかで、利潤は分散化し、資本は蓄積できない、と結論付けているが、改革開放以降では、たとえば、地方政府が「包的」に工場などを経営し、または開発区を建設するなどのなかで、「包」の外部で資本蓄積の役を担うことになったのではないかと推測している。もちろん、このような考え方は憶測の域を出ないが、改革開放以降における諸変化は、資本蓄積だけではなく、技術向上、金融機関の発達など、「包」を取り巻く環境が大きく変化しており、それに伴い「包」の機能も変化している可能性は否定できないであろう。

〈6〉本書では、「多層性」の説明において、「利得の際限なき分散化をもたらす」

「加藤2016: 50」という記述があるが、それ以外で「利潤の社会化」が論じられていない。

参考文献

- 柏祐賢 1986 『経済秩序個性論Ⅱ』柏祐賢著作集第四巻、京都産業大学出版会
- 加藤弘之 1997 『中国の経済発展と市場化—改革・開放時代の検証』名古屋大学出版会
- 加藤弘之 2010 『移行期中国の経済制度と「包」の倫理規律—柏祐賢の再発見』中兼和津次編著『歴史的視野からみた現代中国経済』ミネルヴァ書房
- 加藤弘之 2013 『曖昧な制度』としての中国型資本主義』N T T 出版
- 加藤弘之 2014 『中国型資本主義の「曖昧さ」を巡るいくつかの論点—中兼和津次氏の批判に答える—』国民経済雑誌』第二一〇巻第二号
- 加藤弘之 2016 『中国経済学入門—「曖昧な制度」はいかに機能しているか』名古屋大学出版会
- 加藤弘之・久保亨 2009 『進化する中国の資本主義』岩波書店
- 小熊英二 2014 『真剣に話しましょう—小熊英二対談集』新曜社